

## —高校の授業はこう変わる—

## アウトプット活動を伴うリーディング指導



大阪府立寝屋川高等学校  
平尾一成



## 1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂にあたって、文部科学省は、国際的な指標において日本の子供たちの読解力が低下していることを憂慮し、子供たちの「言語力」育成に力を入れている。高等学校の学習指導要領では、英語や国語だけでなく、全ての科目にわたって横断的に「コミュニケーション能力」の育成を重視している。また、高等学校の外国語科（英語）の目標として、「情報や考えなどを的確に理解し発信するコミュニケーション能力の育成」を掲げている。つまり、単なる技能の獲得よりも、内容伝達の道具として「英語力」を捉えているのである。

新設の科目となったコミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲでは、目標を「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を基礎的なレベルから伸ばし、最終的には社会生活で活用できるようにする。」と定め、具体的な内容として次の4点を示している。

- ア 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。
- イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読暗唱を行う。
- ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。
- エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや

経験したことに基づき、情報や考えなどについて、（簡潔に書く）まとまりのある文章を書く。

（コミュニケーション英語Ⅱより）

このように、「聞く・読む・話す・書く」の技能を総合的に指導するという考え方は、現行版指導要領の英語Ⅰ・Ⅱの指導内容でもあり決して新しいものではないが、ほとんどの高校では依然として文法訳読中心の授業が行われているという実態を受けて、今回の改訂で改めて「4技能を統合する」ということが強調されたのである。

しかし、新学習指導要領で「4技能統合型の授業」や「コミュニケーション英語」という科目名をいくら強調しても、現場の授業が変わらなければ意味がない。また、これまで経験のない先生方に、「英語で授業を行うことを基本とする」と言っても、混乱を招くだけである。本稿では、セルハイ研究の経験を基に、現在も寝屋川高校で継続的に実践している授業内容を紹介し、新学習指導要領の下で行う授業について皆さんと一緒に考えてみたいと思う。

## 2. 寝屋川高校のセルハイ研究

筆者の勤務する寝屋川高校は、平成18年度より20年度までの3年間、文科省よりセルハイの指定を受け、「国際社会に活躍する人材に求められる英語力の育成」という研究開発課題のもと、「リーディングを基軸とした英語による知的コミュニケーション能力の育成」を旨とした。「知的コミュニケーション能力」を「国際社会に生きていく上で必要とされる社会的・文化的論題に対する情報処理能力・論理的思考能力・発表及び発信能力」と捉え、主に次の2点を研究の柱とした。

①知的課題情報やメッセージを読みとる力の育成  
インプット段階の指導

- 教科書の英文と同一の題材を扱う他の英文を読むことにより、情報やメッセージを様々な観点から読みとる力を育成する。

インテイク段階の指導

- 様々な課題に関する英文話題を異なる視点から比較検討し、様々な観点から物事を深く思考し、情報やメッセージを整理して読み取り、まとめる力を養う。

②知的レベルを高めた情報・メッセージを発信する力の育成

アウトプット段階の指導

- サマリー・ライティングなどの活動を通して、知的課題の文章構成に留意し、整理して発表・発信する力を育成する。また、読みとった情報やメッセージを分析し、さらに自分の考えをまとめ加えさせることで、より高い知識レベルの発信を行う力を育成する。

セルハイ研究が始まり、寝屋川高校の授業は、いわゆる受験指導中心の授業から発信型の授業へと転換していった。研究内容の柱である、「知的課題情報やメッセージを読みとる力の育成」と「知的レベルを高めた情報・メッセージを発信する力の育成」の2点を軸に、インプット→インテイク→アウトプットの流れを意識した授業作りに取り組んだ。

### 3. 寝屋川高校の授業

それでは、現在、寝屋川高校で行われている授業の内容を具体的に紹介しよう。本来なら教案や実際のワークシートを提示しながら述べるべきなのだが、紙面の都合もあり、今回は授業の流れと各活動の考え方を述べるだけにとどめたい。

英語Ⅰ・Ⅱの授業では、情報処理のステップに応じて様々なタスクや活動を設定し、教科書の内容を段階的に理解させるよう指導している。各段階において、英文に何度も触れながら言語材料の定着を図り、テキストに書かれている課題や問題、筆者の意図やメッセージを整理して読み取る力を育成している。また、読解の目的を明確にす

るため、サマリーやオピニオンライティングなどのポストリーディング活動（読解後の活動）を設定している。以下に具体的な活動を授業の流れに沿って述べていく。

まず、インプット段階の指導である。

#### リスニングインプット

##### —構造マップを利用したオーラル・イントロダクション

絵や写真などを見せながら話題や背景知識の導入を行うのが、一般的なオーラル・イントロダクションだが、本校では構造マップを利用してオーラル・イントロダクションを行っている。英語の論理構成を理解させるため、教科書のキーワードや要点を図式化し構造マップにまとめていく。このように、構造マップの作成法を黒板上に示すことにより、生徒が自分で構造マップを描けるよう導いていく。構造マップは、論理的な文章を話したり書いたりする上で大切な技術となる。

#### リーディング・インプット①

##### —大まかな理解のための活動

オーラル・イントロダクションで得たスキーマ（背景情報や語彙・文法情報）を足がかりにして教科書の読解活動に入っていく。First Readingとして、CDや教員の音読に合わせて黙読を行う。読み取るポイントを明確化するため大まかな内容を問う質問を与え、細部にこだわらないトッダウン・リーディングを指導する。

#### リーディング・インプット②

##### —詳細な理解のための活動

First Readingが終われば、正確で詳細な理解活動に入っていく。生徒にテキストの内容を整理して読み取らせるため、質問の種類・レベル・順序に配慮したプリントを作る。例えば、(1) 事実、問題、課題を尋ねる質問、(2) 理由や根拠を尋ねる質問、(3) 生徒の経験をもとに考えを述べさせる質問、の順番で与える。生徒の理解を段階的に深めるためには質問の種類と順序は重要なポイントになる。質問は、日本語で提示する場合と英語で提示する場合があるが、英問英答の落と

し穴（英語の質問に対する答を文中から抜き取るだけで、生徒は意味をわかっていないという状況）を避けるためには、日本語の方がよい。正解を確認するときは、まず生徒同士に話し合わせ、なぜその答えになるのか相談させれば、生徒に気づきが起こり、思考活動が活性化する。

### リーディング・インプット③

#### —スラッシュ対訳シートで文法説明

大まかな理解、詳細な理解が終われば、細部の意味確認と文法・構文の説明を行う。スラッシュ対訳シート（スラッシュの入った英文の下に、日本語訳を並べたもの）で、難解な英文の意味理解と説明を行う。難しい箇所はセンテンス単位で空欄にしておき、生徒に訳を考えさせる。このシートで能率よく説明を行えば、音読練習やアウトプット活動の時間を確保することができる。また、このシートを音読練習で再利用し、意味と音声のマッチングを効率的に行う。学習の初期段階で、このようなステップを飛ばすと、音読が意味のない活動になり、コミュニケーション活動を行うおうとしてもうまくいかないことが多い。

次に、インテイク段階の指導であるが、この段階ではアウトプット活動がスムーズに行えるよう言語材料の定着と情報の整理を行う。

### インテイク①

#### —音読で言語材料の定着

音読は、直読直解や直間直解の習慣を育て、リーディングやリスニング力の向上に効果があるということが多くの研究から分かっている。「読む」活動を他の技能へ発展させ4技能統合型の授業を行うためには、音読活動は必要不可欠である。音読の種類と順序に配慮して繰り返し練習すれば、語彙・熟語・構文・文・文章内容が定着しライティングやスピーキング活動で使えるようになる。時間がないという理由で音読活動を省略したり、数回のリッスン・アンド・リピートにとどめたりするケースがよくあるが、アウトプット活動を成功させるためには、リード・アンド・ルックアップを中心とした読指導が必要である。まず、リッスン・アンド・リピートで発音指導を徹底し、CD

の音に重ねて読むオーバーラッピングでリズムや抑揚を練習させる。その後、バズリーディングで個人練習を行い、ペア・リーディングに移る。ペア・リーディングでは、スラッシュプリントを見ながら一人がスラッシュ毎に日本語を読み、もう一人が英文を読む。この活動で英語と日本語を能率良くマッチングさせた後、リード・アンド・ルックアップで英文を脳に沈めアウトプット活動へ繋げる。

### インテイク②

#### —構造マップの作成

内容理解が終われば、文章の論理構成を整理するために構造マップを作成する。最初から自分で作成するのは難しいので、1年生の初期段階では教員が作成した枠組みをワークシートとして与え、その中に著者の主張、根拠、具体例、現状、問題点、解決策などを英語で書き込む。学年が進むにつれて自分で作成できるように指導し、3年生の入試長文読解演習でも、構造マップの技術を応用する。

アウトプット活動では、情報や考えなどについて、話し合ったり、簡潔に書いたりする能力を基礎から積み上げていく。

### アウトプット①

#### —ペアQ&A

各パートの内容理解が終われば、ペアQ&Aを行う。Q&Aと言えば、教員が質問し生徒が答えるというのが一般的な形であるが、この方法では全ての生徒に答えさせることはできない。ペアQ&Aなら、同時に多くの生徒がQ&Aに参加できる。異なる質問とその答が書かれている2種類のプリントを用意し、ペアで交互にプリントから質問を読み上げる。答える側の生徒は、教科書を見ずに内容を思い出して答える。答えに詰まるようであれば、質問する側の生徒がヒントやキーワードを言い助ける。初期の段階ではこの方法がよいが、徐々にステップアップし、生徒が質問を作る創造的なペアQ&Aへ移行する。生徒が自分で質問を作ることができれば、インタビュー活動などのコミュニケーションカティブなスピーキング活動が可能になる。

## アウトプット②

### —ストーリー・リプロダクション

このストーリー・リプロダクションという活動は、読んだ英文の概要や要点を教科書やノートを見ずに英語で再生する活動で、口頭で行う場合と書いて行う場合がある。音読で取り入れた語彙、文法、構文などの知識を実際使用することにより、「使える知識」として定着させることを目的としている。そして、基本事項を定着させるばかりでなく、書く（話す）べき内容を自分で取捨選択し、既習事項や自分の持てる英語力全てを使いながら行うので、格好のアウトプット活動になる。言語知識を定着させ、自分が伝えたい内容をまとめる、このような活動はコミュニケーション力の基礎を作るうえで効果が高い。全てのパートで行うと時間が足りなくなるので、重要なパートやパラグラフを選んで効果的に行うようにする。

## アウトプット③

### —サマリー・ライティング

課全体の指導が終われば、読んだ内容を構造マップで整理し、サマリー・ライティングを行う。できるだけ簡潔なサマリーが書けるよう、例えば「50語程度でレッスン全体をまとめなさい」など少ない語数制限を設ける。また、自分の言葉でサマリーが書けるよう導くためには、いったん日本語でまとめるステップを入れるとよい。

## アウトプット④

### —追加教材と意見構築

生徒の考えを広げ、複数の視点から物事を捉える力を育成するため、教科書の内容に関連する追加教材を与える。この教材は、他社の教科書やインターネットの情報をもとに、ALTが作成するオリジナル教材である。教材を作成する際、教科書よりも易しい英語を使用し、生徒がある程度早く読めるようにする。複雑な内容のものではなく、教科書の情報を補うものや、明らかに反対の立場を示すものを与えるようにする。教科書の内容と追加教材の内容を比較検討し、題材のテーマを複眼的に思考し、自分の意見をまとめるよう指導する。意見を書くときには、自分の主張と根拠を必ず示し、根拠を裏付ける事実やデータを付け加え

させる。教科書を読んだ直後にいったん意見を書かせ、追加素材を読んだ後にもう一度書かかせる、書く内容が質的・量的に向上する。意見を書いた後は、ペアやグループで発表し、お互いにコメントを書いて評価し合う。

## 4. おわりに

以上が、寝屋川高校で行っている授業の概要である。自分の授業スタイルを変えることは容易なことではないが、部分的に取り入れていただければと思う。私たちも試行錯誤でセルハイ研究を行い、現在も日々改善を試みている。何事も一人で行うのは難しいが、みんなで協力して行えば良い考えも浮かぶ。本稿でお伝えした内容が、新学習指導要領下における授業実践の手がかりになれば幸いである。

